

櫻井本『春日左抛御前法楽独吟百韻』訳注（三）

伊藤伸江・奥田 勲

宗祇の句集『宇良葉』には、集の末尾に三種類の独吟百韻が置かれている。このうちの最初の百韻である『春日左抛御前法楽独吟百韻』は、宗祇が五十六歳の時に、室町幕府將軍家の連歌会に初めて参加するにあたり、左抛社に祈念するところあつて詠んだ百韻であつた。この百韻から宗祇の百韻の手法を説明すべく、『春日左抛御前法楽独吟百韻』の訳注を試みることにした。本稿は伊藤が作成し、奥田との検討会議を経たものである。

【凡例】

一、底本は、櫻井健太郎氏本『宇良葉』に付載された宗祇の「春日左抛御前法楽独吟百韻」である。対校本に、①北海学園北駕文庫本（16―28―16―2、D 613、写一冊、1000002643）、②北海学園北駕文庫本（16―34―4―8、D 601、写一冊、1000002671）、③大阪天満宮文庫延宗本（359―11―4―14、写一冊、1000201215）、④京大平松文庫春日末社左「ナゲ」法楽（マイクロフィルム番号MNO: P515）、⑤東大国文研究室蔵『連歌名句』（中世12・7―9）、⑥静嘉堂文庫連歌集書51所収本、⑦大阪天満宮文庫蔵長松本（『大阪天満宮文庫連歌書目録』れ5・11）、⑧天理図書館蔵本（『綿屋文庫連歌俳諧書目録第一』れ4・2―24）を使用し、校異を示した。①③⑤は国文学研究資料館の紙焼き写真、④は京大図書館のHPを参照した。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。原文は翻刻の形で示し「愛知県立大学日本文化学部論集」第九号（二〇一八・三）に掲載しており、適宜参照されたい。注釈本文においては、原文の表記の誤りと考えられる箇所はあらため、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記した。

一、各句には、百韻全体の通し番号を句頭に示し、参考として、各懐紙内でのその句の所在を懐紙の順、表と裏の別、表裏ごとの句の番号で表し、前句を添えた。

一、【語釈】にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献による。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改め、漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直した場合がある。

一、各句には、【式目】【語釈】【現代語訳】の説明項目を設けると共に、二句一連の連歌の中で句がどのように作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮して【現代語訳】の他に【付合】【一句立】の項目を設けた。さらに必要な場合には、【考察】【補説】【他出文献】の項目も設けた。

（初折・裏・十二）露さへやわが住む里をあらすらん

二〇 思ひな置きそうき世なりけり

【校異】 うきよ ① 昔うき世

【式目】 述懐（うき世）（述懐の心、…うき世 世の中）（連珠合璧集）

【語釈】 〇思ひな置きそ…（先のことを）あらかじめ心積もりしておく。あらかじめ思い定めておくようなことは

するな。「御堂殿造り磨かせ給て、莊園多く寄せられ、我族のみ御門の御後見、世のかためにて、行末までとおぼしおきし時、いかならむ世にも、かばかりあせはてんとおぼしけんや。(中略)されば、よろづに見ざらむ世までを思おきてんこそ、はかなかるべけれ。」(徒然草第二十五段)。前句の「露」から「思ひ」置く「呼び出される。「露トアラバ、をく」(連珠合璧集)。「おもひをくべき露の上かは／まくらゆふこよひばかりの柴の庵」(菟玖波集・3330／3331・前中納言定家)。「露もなにをか思ひのこさむ／仮の世に心おくこそはかなけれ」(三島千句第一百韻・70／71)。

○うき世：定め無き無常の世の中。「世トアラバ、〈浮世 あだし世 露の世 夢の世 世の中 世の行えなどいふ。又世にすむと世をすつると、其心辨知べき世〉：露」(連珠合璧集)。「ふりぬる宿はうき世なりけり／いとゞしく浅茅が本は物寂し」(文安月千句第三百韻・44／45・日晟／盛家)。なお、「思ひなをきそうき世なりけり」と同一句が、『新撰菟玖波集』巻七「思ひな置きそ憂き世なりけり／後れじよ忘れ形見も何かせむ」(1356／1357・玄清法師)に見られる。

【付合】次第にさびれ荒れていく里の、草の葉に置く美しい露までも、気づかぬうちに自分が住むこの里を荒らしていくことを意識すれば、何事も移り変わっていつてしまうこの世のはかなさがあらためて思われる。世の無常に気づいたつぶやきを詠む前句に、未来を確たるものと信じて夢見ることをたしなめる付句が付く、二者の語らいのような付合となる。

【二句立】先のことなど思い定めておくものではない。この世はなんともはかなく定めないものなのだ。

【現代語訳】草木に置く美しい露までも、実は私の住むこの里を荒らしているのだろうか。この無常の世の事柄に関して、変わらぬつもりで心積もりするようなことはするものではない。この世というのは、本当にはかなく定めがたいものなのだ。

(初折・裏・十三) 思ひなをきそうき世なりけり

二一 散らずとも見はてん花はなき物を

【校異】なし

【式目】春（花）

【語釈】○散らずとも：散らないでいたとしても。桜が散るのは、はかない世を象徴する事象である。「吹く風に去年の桜は散らずともあなたのみがた人の心は」（続古今集・恋四・女をうらみていひつかはしける・1285・在原業平朝臣、伊勢物語五十一段）。「さくらばなちらばちらなんちらずとも古郷人のきてもみなくに」（古今和歌六帖・さくら・420・これたかのみこ）。○見はてん花：見飽きた花。美しい桜の花は、どれだけ見ても見飽きることはないという気持ちから、「見はてん花はなき」という。「ひととせにひととせながら散らずともいつか桜の花にあくべき」（元真集・あるをんなのもとにて、さくらををしむ・123）。

【付合】憂き世を具体的に想像させる、はかなく散る花へとつなぎ、春の句に転換する。花が散る様が、物思いの要因だが、散らなかつた場合でさえ、花に飽きることはない、もつともつと見ていたいという執着心が起きるものだと、春の花の美しさへと意識を向けていく。

【一句立】たとえ花が散らないとしても、人はいつまでも花を見続けることはできないものなのに、花を見飽きてしまふことはないのだが。いつまでも見ていたい、花の美しさを強調する。

【現代語訳】この世は、つくづく定め難い浮世なのだ。はかなく散りゆく花などに思いをかけ心ひかれてはいけない。もし花が散らないで咲き続けたとしても、花を見飽きるということではなく、花に惹かれる気持ちはなくならないのだけれども。

【補説】第二〇句は、はかなく散る花の様を素直に詠むことなく、あえて散らないと仮定しても、その美しさに執着心を起こしてしまうとすることで、花の美にとらわれてしまう凡俗の心を述べる。花・桜と二句連続させ、理詰め、堅苦しい二〇句を置いた後に、開放感に満ちた二一句へと流す手法に、宗祇の思考方法がうかがえる。

（初折・裏・十四） 散らずとも見はてん花はなき物を

二二 いざ桜とや風は吹くらん

【校異】 や ⑥て かせは ②⑤風も ふく ②⑤ふか

【式目】 春（桜） 桜只一、山桜、遅桜など云て一、紅葉一（一座三句物）

【語釈】 ○いざ桜…さあ、桜よ。風から桜への誘いの言葉。枝を離れ散るように誘う。「いざ桜我も散りなむひとさかりありなば人にうきめ見えなむ」（古今集・春下・77・承均法師）。この歌に関して『両度聞書』では、「ありて世中」のたぐひなり」と注し、「のこりなくちるぞめでたき桜花ありて世の中果ての憂ければ」（古今集・春下・71・詠み人しらず）を示唆する。「野にうちむれて出る狩人／いざ桜我もときそふ春毎に」（顕証院会千句第四百韻・46／47・宗砌／原秀）。「はるかなる都のつとの花散て／桜をいざと誘ふ下風」（小鴨千句第二〇八韻・87／88・心敬／専順）。「花咲けば木陰をあまたたどりきぬ／いざ桜とて枝を手折らん」（寛正六年正月十六日何人百韻・77／78・専順／大況）。○風は吹くらん…風は吹くのだろうか。「山さくら散れば酒こそまれば／花にしるてやかせはふくらむ」（菟玖波集・3764／3765・法眼顕昭）。

【付合】 前句では、散る花の風情がなくとも、花に心ひかれるという気持ちを強く述べるが、付句では、その花が眼前に散る様を表現する。

【二句立】 花を誘う風の気持ちを想像した句。

【現代語訳】 もしも散らないままでいたとしても、花を見るのに飽きたということはないほど、花を惜しむ気持ちは強いのだが、そんな気持ちに水をさすように無情に、さあ、桜よ、散っていいこう、と誘うように風は吹くのであろうか。

(二折・表・一) いざ桜とや風は吹くらん

二三 鳴く鳥の心も知らず春暮れて

【校異】なし

【式目】春(春暮れて)

鳥与獸如此動物可隔三句物

鳥只一

春一

水鳥、村鳥等之間一、鳥獸と云て又一、狩場鳥、浮寝鳥、夜

鳥等は各別物也(一座四句物、新式今案)

【語釈】○鳴く鳥の心：春を惜しんで鳴く鳥の心情。大江千里の『千里集』(句題和歌)「夏景」に、「かぎりとして春の

たちぬる時よりぞなく鳥のねもいたくきこゆる」(「春尽啼鳥思」・29)がある。春の終わりの時期に関わって「鳴く鳥」として詠まれる歌の例となる。○心も知らず：気持ちもわからないままに。気も知らずに。「柴の戸の心もしら

ず秋はきて／恋ちを見するいなおほせどり」(基佐句集・雑・1009/1010)。○春暮れて：春が暮れていき。春が終わると、渡り鳥は飛び去り、山から下り歌声を響かせた鳥もまた山へ戻っていき、春に見かけた鳥はいなくなる。「暮春

の心ナラバ、春くれて 雲に入鳥へふる巢にかへる鳥」根にかへる花落花」(連珠合璧集)。「春を留むるに関城の固めを

用ゐず 花は落ちて風に随ひ鳥は雲に入る」(和漢朗詠集・三月尽・55・尊敬)。「花はねに鳥はふるすにかへるなり

春のとまりをしる人ぞなき」(千載集・春下・百首歌めしける時、くれの春のころをよませたまひける・122・崇徳

院)。「花鳥のあかぬわかれに春くれてけさよりむかふ夏山の色」(玉葉集・夏・首夏の心をよみ侍りける・293・入道

前太政大臣)。

【付合】風に誘われて散る花との別れを前句で、春との別れを鳥を題材として付句で表現した。花と鳥を詠みこみ、

暮れていく春の情景を示す。

【二句立】鳥にも、人同様にゆれうごく心を見、そうした春を惜しむ鳥の心情にもかかわらず、季節は無情に移りゆく

くことを詠む。

【現代語訳】さあ桜よ、散っていこうと、風は無情にも花を吹き散らすのであろうか。春との別れを惜しんで鳴く鳥

の心も知らぬ顔で、春もまたつれなく暮れていつて。

【補説】『和漢朗詠集永濟注』では、前掲の尊敬の詩句に「春ヲト、メント思ニハ、関モ城モ、カナヒカタシ。花ハ風ニシタカヒテ、チリハテヌ、鳥ハ雲ニ入テ、アトモト、メスト云也。」と注するが、『和漢朗詠集和談鈔』では「春ヲ留ントスルニハ、関モ城モ難^レ叶。花ハ風ニ随^テ散リ、鶯ハ旧栖ニ帰スト云義也。」とし、尊敬の詩句の「鳥」をも、千載集の崇徳院歌の「鳥」と同一に見ている。和歌では玉葉・風雅集に多く「花鳥」とセットで詠まれるが、この時、古巢に戻り、都人が声を聞かなくなる鳥は鶯であり、したがって二三句の「鳴く鳥」には、鶯を考えてよいか。

（二折・表・二） 鳴く鳥の心も知らず春暮れて

二四 霞を野辺に分くる狩人

【校異】 なし

【式目】 春（霞） 霞（聳物） 野辺（一座二句物、肖柏追加）

【語釈】 ○霞をく分くる…立ち込めた霞を分けていく。空の霞を分けるものとして、和歌では春の空を飛ぶ帰雁やたづが詠まれてきた。「春くれば霞を分て飛雁の越路のかたへ羽むけする也」（基佐集・或人の家にて、帰雁をよめる・22）。「霞を分くる井手の中道／帰雁山の下帯引すてて」（竹林抄・春・48・専順）。○野辺に分くる…野原に分けていく。「野辺に」と加えているのは、空ではない野に視点を置いていることによる。この句は、空では雁が霞を分けて飛んでいくが、野辺では狩人が霞の中を分けて進んでいく、と見ることができ、また、その際には、「雁」と「狩」が掛詞として響いてくるか。○狩人：狩り人は、獲物を追ひ、捕らえるために野辺を進む。「こゝろもなきは野への狩人／古寺の庭をは道に踏なして」（行助句集・283／284）。「風さえて鳥も袖にやおちぬらむ／鷹は空飛ぶ野辺の狩人」（太神宮法楽千句第九百韻・79／80）。

【付合】 前句の空の鳥、付句の野の狩人を対比させる。付合では、前句の鳥は獲物となろうか。

【一 句立】春の野の情景を詠む。春の四句目であり、「狩人」の語を使うことで、次の句の句境を変化させるぎっかけとしてゐる。

【現代語訳】春を惜しんで鳴いている鳥の気持ちもかまわず春が暮れていき、野辺には霞を分けて進む狩人がいる。

【考察】16句から24句までの進行は、16（月）、17（天つ鷹）、18（時雨）、19（露）と秋の景物を詠み進めてきた後に、20句においてそうした情景に心をとられてはならないと述べ、再び21（花）、22（桜）、23（春くれて）、24（霞）と春の景物を詠み進めている。20句を核として、秋の句の展開と春の句の展開を置き、これらの景物は「うき世」の仮のものであると深く考える形になっているのである。20句の「うき世なりけり」の詠嘆は、いわば16から24句をおおう感慨で、非常に深い意味が込められていることが知られる。

（二折・表・三）霞を野辺に分くる狩人

二五 なす罪の道にはなどか迷ふらん

【校異】なす⑤なす つみ⑤つみ ⑥何

【式目】釈教（罪）

【語釈】○罪：殺生の罪。「罪トアラバ、：狩場」（連珠合璧集）。「ひさきの浦にあさる蟹人／つみの道隠れん方はよもあらし」（初瀬千句第四百韻・38／39・宗砌／重棟）。「なすつみはさそなこん世の秋のやみ／木の下みちの小鷹かり人」（小鴨千句第二百韻・69／70・宗砌／忍誓）。「目のうへまでもかゝる竹かさ／狩人のつみのはかりをおもひしれ」（菟玖波集・1311／1312・良阿法師）。○などか迷ふらん：どうして迷うのだろうか。「ともしの松をたのむかり人／罪科をしらで此身や迷ふらん」（熊野千句第二百韻・14／15・専順／頼暹）。

【付合】野の霞の中を迷わず進む狩人の姿と、同じ狩人が死後に迷妄の道にさまよう姿とを対比した。殺生の罪を犯している狩人にとり、来世に迷妄の道にさまようことは、あらかじめ与えられた宿命である。

【一句立】犯した罪の道には、なぜ迷うのであろうか。罪業により、救われることなく迷いの道に入りこむ運命であることをいう。

【現代語訳】立ち込めた霞を分けて、迷うこともなく野辺をすすむ狩人がいる。だが、彼は犯した殺生のむくいを受けて、迷妄の道に迷うことだろう。どうして来世への道には、このように迷ってしまうのだろうか。

（二折・表・四）なす罪の道にはなどか迷ふらん

二六 遠しと後の世をな思ひそ

【校異】なし

【式目】述懐（後の世） 「述懐の心、∴後の世」（連珠合璧集）

【語釈】○遠しと∴はるか先のことだと。「とほからぬのちのよなるをよそにして／われをおくらすけふりかなしも」（壁草・雑下・2269／2270）。○後の世∴来世。「罪トアラバ、∴後の世」（連珠合璧集）。「後の世のこと心に忘れず、仏の道うとからぬ、心にくし。」（徒然草第四段）。

【付合】前句で、この世での行いが来世に報いてしまうという仏教思想の一般論に広げ、来世は遠いことではないと戒めの句でつなぐ。第二〇句にも禁止表現がある。

【二句立】来世をはるか先の話と思ひ、忘れて過ごしている凡人のあり方を戒める句。

【現代語訳】犯した罪ゆえに、どうして六道に迷わないことがあるか。後世のことを遠い先のことと思つてはならないのだ。

（二折・表・五）遠しと後の世をな思ひそ

二七 行末の老いをば待たじ我が命

【校異】 老い ⑧花

【式目】 述懐（老い、命） 「述懐の心、…命玉のを…老老らく」（連珠合璧集）

【語釈】 ○行末の老い：我が身のこの先の老いたさま。「歎けたゞ猶ゆく末の老の空／来む世を安く身におもはゞや」（延徳元年五月十一日何路両吟百韻・13／14・宗元／宗祇）。通常は「老いの行末」と表現するものであり、「行末」を強調し前に持ってきた表現である。今はまだ若く、この先、年月がたつた後に、老いの時期となることを示唆している。○老いをば待たじ：年を重ねることができないだろう。「老い来りて、始めて道を行ぜむと待つことなかれ。古き塚は、多くこれ少年の人なり。」（徒然草第四十九段）。○わが命…私の齡。壽命。「あすまてはたのまさりつる我命／もしなからへはけふもいにしへ」（菟玖波集・3180／3181・安倍為信）。

【付合】 述懐の二句目。付句はわが身にひきつけて、前句の理由を述べる形となる。

【一句立】 我が身を省みて死を予想する。

【現代語訳】 はるか先のことだと、後の世を思ってはならない。この私の命は、この先老いていくのを待つてはくれないだろうから。

（二折・表・六） 行末の老いをば待たじ我が命

二八 かへさやすらへ語るふるさと

【校異】 やすらへ ③や^{本ノマ、}へ ⑦や^{本ノマ、}へ ふるさと ③④⑥⑦⑧ふるさと

【式目】 羈旅（かへさ、ふるさと） 「故郷トアラバ、〈故郷に品々あり。ふるき都を故郷と云。又今すむ里のふりたるをも云。又旅に出し我方を故郷とも云。〉」（連珠合璧集） 故郷只一 名所引合一（一座二句物）

【語釈】 ○かへさ…帰り道。帰り。前句の「行末」の「行」と対になり、前句が人生を語ることを鑑みれば、人生の後半、人生の帰り道といった意味をも持つかもしれない。○やすらへ…四段活用動詞「やすらふ」の命令形。「や

すらふ」はゆつくりする、休む。和歌では多くほととぎすや雁などに「しばしやすらへ」と呼びかける表現で使われる。「行く春も山路やすらへ名もしらぬ木草の花のちりのまがひに」（春夢草・暮春・967）。「とふ雁は奥つの浪に遠さかり／かへさやすらふ秋の舟人」（永原千句第二百韻・5／6・吉綱／宗哲）。○語るふるさと…故郷を語ること。

「ともなふもみな旅人の山こえに／袖うちぬらしかたるふる郷」（葉守千句第九百韻・55／56・宗長／肖柏）。校異にある「ふるごと」ならば、「昔の思い出を語る」ということになる。「又くりかへしかたるふるごと／老かみやとしへぬ間にも忘るらん」（園塵第三・雑下・4024／4025）。

【付合】「行末」の「行」に「かへさ」を対した。

【一句立】ふるさとを語りつつゆつくりと帰る、心なぐさむ帰り道の様を詠んだ。

【現代語訳】私の命は、この先、年取ってから何かするとういうのを待てるほど長くないだろう。けれど、帰り道はゆつくりしていつてくれ、なつかしい故郷のことを語るのだ。

（二折・表・七） かへさやすらへ語るふるさと

二九 たのむ夜にまだ深はてぬ月をみて

【校異】なし

【式目】秋（月） 恋（たのむ） 夜（夜分）

【語釈】○たのむ夜…一句では、恋人が来てくれないかと心にたのみにしている夜。「夜」は「世」と掛け、たずねてくれるのではと期待を持っている恋人との仲をも示すこともできる。「わするらむ人をはかなくたのむ世に／いつへき物か身をかくす山」（表佐千句第一百韻・87／88・紹永／宗祇）。ここは前句の「ふるさと」に続き、旅の帰りがけに、ゆつくりと故郷を思う夜をさす。旅の夜空に月をみて故郷を恋しく思うのは、阿倍仲麻呂など古来例が多い。

「ふるさとの空まですめる心かなたびねふけゆく月をながめて」（御裳濯和歌集・旅月といへる心をよめる・416・寂延

法師)。「日そ長きいつかあひみむ旅の友／たのむこよひの古郷のゆめ」(行助句・1315/1316)。○深はてぬ…完全に夜がふけてしまったのではない。夜が更けきつてはいない。「かり枕涙の月もふけはてて／夜半のはしるに行(待)よはるころ」(河越千句第五百韻・19/20・満助/修茂)。

【付合】付合では、秋の旅の句となる。↓「たのむ夜」の語釈参照。

【二句立】付句一句では恋の句となる。あの人に来てくれるかとのみにしている夜、まだ完全に夜が更けた様子ではない月を見て、のぞみをつないでいる。夜が更けてしまえば、訪れてはもらえないことがはつきりするが、あえてそこまで遅くなつてはいない時分を句とする。「たのむ夜の木のまの月もうつろひぬ心の秋の色をうらみて」(拾遺愚草・恋・2555)。

【現代語訳】帰り道はゆっくりしながら、故郷のことを語ろう。今日こそはと思う夜に、まだ完全に夜が更けきつてはいない月の様子だから、月をながめながら。

(二折・表・八) たのむ夜にまだ深はてぬ月をみて

三〇 訪ふやと聞けば秋風ぞ吹く

【校異】や②⑤さ ③や(ルビのみ朱) ④⑥⑧か

【式目】秋(秋風) 恋(訪ふ)

【語釈】○訪ふやと聞けば…訪れてくれたかと(物音を)聞けば。「我を君とふやとふやと松風のいまはあらしとなるぞかなしき」(古今和歌六帖・あらし・434・ふんやのやすひで、夫木和歌抄・7729にも入る)。「雪の中に心かよはば問ふやとて我をも人の今朝や待つらむ」(外宮北御門歌合元亨元年・朝雪・50・渡会盛行)。○秋風ぞ吹く…秋風が吹いていることだ。「秋」には相手が自分に飽きてしまったという「飽き」を掛ける。

【付合】恋人の訪れを待つ夜、ふけていく月を見ながらも、それでもまだ期待を持っている時分に、風の音を恋人の

来訪と聞きまちがえる様を詠む。「君待つと我が恋ひ居れば我が屋戸の簾動かし秋の風吹く」（万葉集・卷四・488・額田王、新勅撰集・恋四・882にも第五句「秋風ぞふく」で入る）。

【二句立】待つ女性の側の、恋人の訪れと風の音を聞きまちがえる様子を詠む。

【現代語訳】あの人を訪れてくれるかと心頼みにしている夜、まだ完全に夜がふけたのではない月の様子を見ながら、もしや訪ねてきてくれたかと、物音に耳をすますけれども、それはあの人を私が私に飽きてしまったことを示す秋風が吹き、音を立てただけなのだ。

【他出文献】老葉（吉川本）・恋下・1025 「とふかときけは」

（二折・表・九）訪ふやと聞けば秋風ぞ吹く

三一 花薄君が植ゑしをしのぶらん

【校異】を ①や^を ③④⑥⑦⑧や し^{のぶ} ①忍^イふ

【式目】秋（花薄）哀傷（しのぶ）

【語釈】○花薄：穂が出て、花が咲いたすき。はやく万葉集160、1637などに「はだすすき」があり、「はだすすき」が転じたものが「はなすすき」と考える説もある。例えば、『袖中抄』に、「顕昭云、はたすゝきとは、花すゝき歟。たとたと同ひゞきの字なり。」という。「めづらしき君がいへなるはだすすき穂に出づる秋の過ぐらく惜しも」（万葉集・160・内舍人石川朝臣広成）は、『宗祇抄』では注はないものの、「珍しき君か家なる花薄ほに出る秋のすくらくもおし」と記す。また、「花薄」は古今集にも六首（うち長歌一首）あり、「秋の野の草のたもとか花すすきほにいでてまねく袖と見ゆらむ」（古今集・秋上・243・在原棟梁）、「花すすき きみなき庭に むれたちて そらをまねかばはつかりの なぎ渡りつつよそにこそみめ」（雑体・1006・七条のきさきうせたまひにけるのちによみける・伊勢）等から、「まねく」と寄合である。「薄トアラバ、へしのすゝき 花すゝき 村薄 一むらすゝき 絲薄 しの薄ほほに出ぬ薄也。しのゝ

お薄ともいふまねく…」（連珠合璧集）。

「花薄」は三島千句に三度使われ、老葉などの句集にも多くあり、宗祇の好んだ語の一つ。「なをさりともの手まくらの月／ほにいて、おもひいる野・花薄」（三島千句第二百韻・52／53）。「おる人みえぬ萩の一本／花すゝき袖ふれよとやまねくらん」（老葉（吉川本）・375／376・宗祇）。宗祇周辺の連歌作者の句も多い。その際、「花薄」は、なき人の形見として詠まれることがあるが、宗祇自身は、句例から見て、「女郎花」が女性を表すように、女性を意識した恋情の表現として多く詠んでいると思われる。「かれねただかたみはかなきはなすすき／秋の風にも面影ぞ立つ」（葉守千句第八百韻・31／32・宗友／肖柏）。「ひととはかへらぬ秋かせのやど／はなすすきまねくたもとに露落ちて」（老葉（吉川本）・373／374・宗春（兼載））。○君が植えし：あなたが植えた。この表現と本来結びつくのは、次にあげる、藤原俊基をしのぶ古今集の歌から「一むら薄」である。「きみがうゑしひとむらすすすき虫のねのしげきのべともなりにけるかな」（古今集・哀傷・853・みはるのありすけ）。「一むらすすすき」ならば、今はなき人をしのぶという、哀傷の意が強く感じられる表現になる。「身にぞしむ一村薄秋風のまねくほどだにふかぬ夕べは」（草根集・閑庭薄・2073・永享五年十一月十二日詠）。「かれのにもなほかけたのむむしのこゑ／一むらすすすきちりなつくしそ／あき風やわが袖にのみやどらまし」（三島千句第一百韻・7／8／9）。○しのぶらん：しのんでいるのだろう。「昔トアラバ、：しのぶ：古郷」（連珠合璧集）。

【付合】「秋の野の草のたもとか花すすきほにいでてまねく袖と見ゆらむ」（古今集・秋上・243・在原棟梁）から、前句の「とふ」に呼応する「まねく」薄をよびこんでいる。

前句では、秋風の音を、待つ人の訪れかと思う女性の立場から詠む。付句では、庭の花薄は、大切な人が植えたものであったとし、植えた人をなつかしく偲ぶ人の立場で詠んでいるよう。

【一句立】よく知られた古今歌の「一むらすすすき」を「花薄」に変えての詠。「花薄」ならば、「袖」「まねく」などと結びつき、女性を思わせる見立ての表現に近くなる。

【現代語訳】人が訪ねてきたのかと聞き耳を立てれば、それはただ秋風が吹いているだけだった。風が吹く庭では、あなたが植えた花すすきが、あなたをしのんでいるかのように、花穂が招いてゆれていることよ。

【他出文献】老葉（吉川本）・恋下・1026（「君かうへしや」）

【補説】第二句に関して、「君が植えしを」「君が植えしや」と二系統の本文がある。「君が植えしや」であるならば、「あなたが植えたあの花薄であるうか、あなたを恋い慕うかのように穂がゆれまねいている」となる。

（二折・表・十）花薄君が植えしをしのぶらん

三二 尾上の宮の跡の悲しさ

【校異】なし

【式目】懷田（跡）

【語釈】○尾上の宮：「高円の尾上の宮」ならば、聖武天皇の離宮であった高円の尾上の宮。奈良県奈良市高円町の高円山にあり、周辺は萩の名所として知られた。しかし、後鳥羽院の水無瀬離宮を「尾上の宮」と呼ぶ場合もある（↓奥田勲「心敬の詞―「尾上の宮」の転生―」（『心敬連歌 訳注と研究』）。心敬の『芝草句内岩橋』で自句「爪木とる尾上となれる里はあれて」に対し、「ひとへに、後鳥羽院の水無瀬の御跡のあはれを申し侍るなり、皇居のほかのはるかの嶺に、尾上の宮と名付けて、かたじけなく住ませ給ひし」と自注をつけている。「里はあれぬをのへの宮のおのづからまちこしよひも昔なりけり」（新古今集・恋四・水無瀬の恋十五首の歌合に・1313・後鳥羽院、水無瀬恋十五首歌合では「故郷恋」を引いての注であり、明らかに水無瀬離宮を尾上の宮とする。「小萩うつろひ小鹿鳴く道／薄散る尾上の宮の跡古て」（竹林抄・秋・340・心敬）。上記心敬句に対して「萩を専に詠めるは、高円の尾上の宮なり、水無瀬にも尾上宮あり」（竹林抄之注）と記しており、宗祇も二箇所の「尾上の宮」を知っていたこと、萩に付けた宮は高円宮と常識的な判断をしていることがわかる。この第三二句は、萩ではなく薄に付けた句であるが、心

敬の竹林抄句にも薄があり、高円か水無瀬か確定できない。愚句老葉の自注にも言及はない。しかし、金子金治郎氏が宗牧あたりの注かと推定される老葉注（頼原文庫本）は、本句に關し「此尾上の宮、後鳥羽院の御跡也」という（↓第三三句【補説】）。水無瀬の宮と見る見方が有力であろうか。

宗祇が、「尾上の宮」と「すすき」とで、荒れた秋の光景をつくりだすことは、次の句のように例がある。「むかし恋しき秋かぜぞふく／人すまぬおのへの宮のむらすき」（老葉（吉川本）・秋・377／378、老葉（毛利本）349／350、老葉（宗訊本）361／362にも入る）。愚句老葉では、「むかし恋しき秋かぜそ吹く／人すまぬ尾上の宮の花薄」（410／411）であり、自注は「あれのみまさる宮のうちとあるをたよりにて、所かへても花すきをおもひよするにや」とする。○跡のかなしさ…荒れ果てた跡を見ると、悲しい思いがこみあげてくる。無常の世の有様を、朽ち果てたいにしえの建造物により感じとっている。なお、「悲し」は第五二句にも見え、後の世に迷うであろう予感が表現される。

【付合】語釈であげた愚句老葉の付合が第三〇句から第三二句までの流れとよく符合している。「花薄」から「尾上の宮」を呼び込み、「しのぶらん」から「悲し」へと、眼前の景に感情を直接述べた句にしている。

【二句立】今は跡しか残っていない昔の宮趾に悲しい気持ちを抑えきれない様子を述べる。

【現代語訳】花薄は、遠い昔、わが君がお植えになったものだが、私同様昔をしのんで、まねくように穂がゆれていることであろうよ。そんな様子につけても、この尾上の宮の跡は悲しく思われることだ。

【他出文献】老葉（吉川本）・冬・655、老葉（毛利本）・冬・583、老葉（宗訊本）・冬・615、愚句老葉・冬・698

【補説】「尾上の宮」については、奥田勲「心敬の詞―「尾上の宮」の転生―」（『心敬連歌訳注と研究』Ⅱの4のiv）が本句例もあげつつ詳しく論じている。

（二折・表・十一） 尾上の宮の跡の悲しさ

三三三 山深き雪を鹿のみ踏み分けて

【校異】なし

【式目】冬（雪） 山（山類） 雪（降物） 鹿（動物）

【語釈】○山深き雪…山の奥深さと雪の深さが重ね合わされた表現。「山ふかき雪よりたつる夕けぶりがすみがまのしるべなるらん」（風雅集・冬・874・前中納言雅孝）。「山ふかき庭に宮古の雪もがな」（下草・こし路に侍しとき・1471）。○鹿のみ踏み分けて…鹿だけが踏み分けて（跡をつけながら）通い。「ふみわくるしかぞ山路のしるべなるさらであとなき野べのしら雪」（範宗集・野雪・426）。

【付合】愚句老葉の宗祇自注は、前句の尾上の宮の跡を、鹿の跡にとりなすと説明している。鹿が雪に足跡をつける、その跡とする。「小倉山あさ行く鹿の跡ならで人もふみみぬ宿のしら雪」（為家集・冬・880）。

【二句立】山の奥深く積もった深い雪は、鹿だけが踏み分けていて（他に跡をつけるものは何もない）。深山に積もる深い雪の、鹿以外は分け入っていくものもない静寂のありさまを詠んだ。

【現代語訳】山の奥深く積もった深い雪は、鹿以外に踏み分けて通う生き物もない。誰も住んでいない尾上の宮の趾には、雪にそんな鹿の足跡のみが続ぎ、それを見るにつけても悲しいことだ。

【他出文献】老葉（吉川本）・冬・656（「山ふかみ」）、老葉（毛利本）・冬・584、老葉（宗訊本）・冬・616、愚句老葉・冬・699（「山深き」）

【補説】『愚句老葉』『老葉注（頼原文庫本）』を示す。

『愚句老葉』

六九八 尾上の宮の跡のかなしさ

六九九 山深き雪を鹿のミふミわけて

自 尾上の宮の跡を鹿の跡にとりなせり、鹿のミにて誰も住絶ぬとハ聞え侍らんや
長 尾上の宮の跡を鹿の跡に取なせり

『老葉注(頼原文庫本)』

五四〇 尾上の宮の跡のかなしき

五四一 山ふかき雪を鹿のみふみ分て

此尾上の宮、後鳥羽院の御跡也、さても鳥羽院の後ハ、尾上の宮、鹿のふしとなる事のかなしきよと、見る心ナリ

(二折・表・十二) 山深き雪を鹿のみ踏み分けて

三四 夕べの雲の遠方の旅人

【校異】の ⑥を 旅人 ③たひく本テマ、旅人 ⑦たひく本テマ、

【式目】羈旅(旅人) 雲(簞物)

【語釈】○夕べの雲：夕暮れ時に空に見えている雲。暗くなる前、空を流れてどこともなく消えていく。「よもしらじ風のやどりは尋ねとも夕の雲の帰るところを」(正徹千首・雲・801)。「枯野吹く風はいづくにやどるらん／夕の雲の寒き山もと」(竹林抄・585・専順)。「夕の雲になをそ恋しき／かへる道なきを昔に忘れ来て」(下草・雑下・1115／1116)。居場所も行先も定まらないという点で、夕べの雲と旅人とは同様である。「草枕たびとなりなば山のべにしらくもならぬ我ややどらむ」(後撰集・羈旅・1358・伊勢)。○(雲の)遠方の旅人：(雲の下の方の)はるか遠方にいる旅人。「山かぜもしぐれになれる秋の日にころもやうすきをちの旅人」(風雅集・秋下・秋御歌の中に・641・伏見院)。「いかがかゆらむをちの旅人／関の戸は浪間もみえず清見がた」(菟玖波集・3480／3481・前大納言経継)。「郭公よそに軒ばのくれもうし／山ほのかなる雲のをちかた」(表佐千句第四百韻・51／52・宗祇／専順)。

【付合】付句で、雪の積もった夕方、空に白雲が流れて渡る趣向をふまえ、雲の下方はるかに旅人の姿を点描した。眼前の雪は深く、鹿の足跡のみが付いている。前句と付句とで近景と遠景を対比させている。

【一句立】夕暮れ時にたなびいて消えていく雲のあたり、遠方の空の下に見える旅人の姿を詠む。

【現代語訳】山の奥に積もった深い雪は、鹿が踏み分けて通った跡があるだけで道もみえない。そんな山の夕暮れ時、空に雲が流れ、雲の下の方はるか遠くには、旅人の姿が見える。

【補説】「夕べの雲」という表現は、夕暮れ時に空に見えてはかなく消える雲をさすが、雪の夕の雲に関して、正徹物語に、「暮山雪」題の正徹の自讃歌「渡りかね雲も夕をなほたどる跡なき雪の峯の梯」があり、これには「雲は朝夕わたるもの也。しらく降つもりたる雪に夕もしられねば、雲もたどりて渡かぬるか、雪ふりつみたる山の夕をみやれば、のどかにわたる雲のおぼゆる也。かやうに心をつけてみれば、まことにわたりかねたる風情ある也。又梯の雪に人のかよふ跡もなければ、雲も渡かぬるかと思ふ心もある也」と説明がある。

正徹歌は、次のような情景を詠んだものである。山に深い雪が積もり、一面の白い雪には人の足跡もなく、その白さゆえ夕暮れになったこともわからない。夕暮れ時にのどかに空を渡る雲も、雪に迷って渡りかねているだろうかと思えたところ、確かにそう思ってみれば渡りかねているように見える。次の表佐千句の専順句は、正徹の自讃歌をふまえたものである。「けぬが上の雪の山かけ道たえて／ゆふべの雲のわたるかけはし」（表佐千句第九百韻・81／82・宗祇／専順）。表佐千句は、文明八年三月に張行しており、本百韻と張行時期が非常に近い。そこから、宗祇が、第三三句の「山深き雪」から、「夕の雲」を導く背後には、鹿の足跡はあるものの、正徹の自讃歌の言う、人の足跡もない真つ白な雪が、深く積もった山の夕暮れ時、空に夕の雲が流れている情景を考えうるであろう。それゆえ、第三四句には、真つ白い雪道に、雲同様に旅人も迷っているイメージがあるとみだ。

（二折・表・十三） 夕べの雲の遠方の旅人

三五 都こそ帰るを見ても恋しけれ

【校異】 こそ ④にそ

【式目】 羈旅（都、帰る）

【語釈】○都こそ…恋しけれ…都が恋しいことだ。都を離れ、鄙に在る人物の立場で述べた感慨。「身をうらかぜに袖はぬれつゝ／都こそかへる浪にも恋しけれ」(老葉(吉川本)・旅・1271/1272)。○帰るを見ても…旅人が都に帰って行くのを見るにつけても。「天津かり帰るをみてもいと、しくいつかと花の都をぞ思ふ」(再昌草御所本・809・享祿四年二月十四日詠)。また、夕暮れ時は人が家に帰る時分であるが、夕暮れ時の雲も、人と同様に「帰る」ものであるのは、表佐千句第一百韻の次の付合からもわかる。「雲かへる山やゆふべをいそぐらむ／柴持つ人の休むかけはし」(9／10・承世／専順)。

【付合】前句の旅人の姿に、自らの望郷の念を表現する。

【一句立】都恋しさを素直に表出する。

【現代語訳】夕暮れ時に流れる雲のあたり、遠方に旅人の姿が見える。人間同様、雲も家路をたどるべく空を帰り、旅人もまた都に帰って行く姿を見るにつけても、都が恋しいことだ。

(二折・表・十四) 都こそ帰るを見ても恋しけれ

三六 つらき三年をおくる島国

【校異】島国 ⑤しま国

【式目】雑

名所にも水辺にもあらず

【語釈】○つらき三年…前句と合わせて意味をとれば、都に帰れないつらい三年間。三年間は、期間としては一つの区切りとなる長さであるが、例えば光源氏の須磨・明石蟄居の三年、菅原道真の太宰府左遷の三年、平家物語俊寛の鬼界ヶ島での三年などが連歌の題材になっている。「すまの里垣ほの柴もたゝしはし／三年すくるはほとなかりけり」(宝徳四年千句第十百韻・25／26・英阿／金阿)。○島国…遠くの島国であれば、罪人の流刑地が思われる表現になる。「なすつみはいひのがるべきかたもなし／とをしま国にすみもこそせめ」(聖廟千句第一百韻・89／90)。例え

ば、宗砌は平家物語に題材をとった句を用いる傾向があるが、「島国」もよく使う。「草木をミてそ春秋をしる／こよになき遠嶋くりの舟の中」（宗砌法師付句・1745／1746）。また、源氏物語須磨卷での様も「島国」と使われる。「いつまですまん遠き嶋国／明ぬまの月影かゝるあはちかた」（萱草・秋・548／549）。

【付合】平家物語において、鬼界ヶ島へ流された丹波少将成経、平判官康頼、俊寛僧都のうち、成経と康頼は熊野権現の加護により二年目に赦されたが、俊寛は鬼界ヶ島で三年の月日を送り亡くなった。この逸話を踏まえた付合と見ることが出来るかもしれない。都を恋しく思う気持ち、島国で三年間暮らした人のものであると説明した付け。

「うみをもわたる思ねの夢／故郷はとをしま国にあけて」（老葉（吉川本）・1279／1280）。「都のつてもはるそまたる、／遠しまに哀ことしも早過て」（園塵第二・1948／1949）。

【二句立】つらい三年間をすごさねばならない島国ということを詠んだ。「つらき」ことの内容を前の句や次の句の展開にゆだねた句。

【現代語訳】都に帰る人の姿を見るにつけても、真に都が恋しいなあ。この島国でつらい思いの三年間を送ったのだから。

（二折・裏・一） つらき三年をおくる島国

三七 海人の子の親の別れもいかばかり

【校異】も ⑥の

【式目】雑（親の別れ）

【語釈】○海人の子…漁師の子。氏・素性がはっきりしない者のことという。「海人トアラバ、鹽焼くむ共 しほたる、
（詞にてはしほる、心也）」（連珠合璧集）。「白波のよするなぎさによをつくす海人のこなればやどもさだめず」（新古今集・雑下・1703・よみ人しらず、和漢朗詠集の「遊女」にも入る）。「すまの海なぎさの暮に綱引きて／いり日あかしに

かへるあまの子」(小鴨千句第一百韻・47/48・宗砌/心敬)。「こころにひまのなきやあまの子/袖のうへはた、浪こゆるなきさにて」(老葉(吉川本)・恋上・365/366)。○親の別れ：親との別れ。「たらちねのおやのわかれもわかれにしうき世の関もいであての身や」(壬二集・関・685)。○いかばかり：どれほどばかり。この語句により、前句との付合、次の句との付合が、かけてには、うけてにはとなる(↓【付合】)。

【付合】「島」から「海人」を、「つらき」から「別れ」を連想した。海人の子は海辺に暮らし、浪に袖をぬらす生活を送っている点も、涙に縁がある。付句は前句の句頭に繋がる言葉が句末に詠んでおり、かけてには(知連抄)の形になっている。

【一句立】漁師の子も親との別れはどれほど悲しいことだろうか。

【現代語訳】たとえ、漁師の子のような、貧しく教養のない者でも、親との別れはどれほどかつらいであろう。誰にとっても親との別れはともつらいものなのだ、そんな別れの後三年間を島国で過ごすのだ。

(二折・裏・二) 海人の子の親の別れもいかばかり

三八 あはれにけぶる塩釜の浦

【校異】に ③と ⑦と け ⑤は

【式目】雑 塩釜の浦(名所)

【語釈】○あはれにけぶる：しみじみと心にせまる様子に煙っている。塩を焼く煙によって煙る様子。「たらちねの越し跡までもひ出る折しもけふるうらのしほかま」(前参議時慶卿集・塩屋のけふり立をみて、先年亡父このほとりを越、身まかられし事共思ひ出て・56)。○塩釜の浦：現在の宮城県塩釜市松島湾の内にある塩釜湾。陸前国の歌枕。宗祇は『浅茅』において、陸奥の歌枕に「塩釜浦」をいれ、「みちのくのいづくはあれど塩がまの浦こぐ船の縄手かなしも」(古今集・みちのくうた・1088、初句「みちのくは」)をあげている。塩釜の浦の煙は、次にあげる古今集

や新古今集の歌により、故人を焼く煙を連想させることから、哀傷の意を表現してもいる。「煙トアラバ、…しほやく…しほがまの浦」（連珠合璧集）。「みし人の煙になりし夕よりなぞむつまじきしほがまの浦」（新古今集・哀傷・よのはかなきことをなげくころ、みちのくにに名あるところどころかきたるゑを見侍りてよめる・820・紫式部、紫式部集48）。「君まさで煙たえにししほがまのうらさびしくも見えわたるかな」（古今集・哀傷・河原の左のおほいまうちぎみの身まかりてのちかの家にまかりてありけるに、しほがまといふ所のさまをつくれりけるを見てよめる・852・紀貫之）。「けふりやたゝんしほかまの浦／松しまのまつよりかすむ朝ほらけ」（園塵第一・7／8）。

【付合】親の火葬の煙を、塩を焼く煙にとりなした。本付合では、前句の句末から付合の句頭が意味上続く形となる、うけてには（知連抄）と呼ばれる形となっている。

【一旬立】塩釜の浦のさびしい情趣を詠む。

【現代語訳】漁師の子のような貧しく教養のない者であっても、親との別れはどれほど哀れで悲しいものであろうか。亡き親が煙となって空にのぼっていく、しみじみと悲しいその煙のように、塩を焼く煙で煙っている塩釜の浦の様子よ。

（二折・裏・三） あはれにけふる塩釜の浦

三九 水寒き川原に秋の日は暮れて

【校異】川原に秋の日は暮れて ⑥川原の秋に日はくれて ⑦一旬欠

【式目】秋（秋の日）「秋の心、…秋の日」（連珠合璧集） 川原（水辺）

【語釈】○水寒き…水がいてつくように冷えているさま。歌では、冬の雪の日などの景に使用されるが、宗祇は、秋の夕暮れ時、気温が低下し、水辺に寒い気配が漂う様子をこのように詠むようである。「いなくきに雪はならひて水寒き刈田をみれば雁ひとりなく」（草根集・残雁・5628）。「木をこる谷にけふりたつみゆ／水さむき秋の河上日は暮

て」(三島千句第十百韻・94/95)。○秋の日は暮れて…秋の太陽は沈み一日が暮れていって。秋の日は暮れるのが早い。「秋の日は程なくくるゝかひもなし人のいそかぬ中の契りは」(草庵集・秋夕待恋・960)。「秋の日はかちのにくれてたつのとふみほのみさきに霧立渡る」(宗祇集・崎霧・135)。

【付合】藻塩を焼く煙のあがる前句に、季節の感覚を加えた。

【一句立】日も落ち、気温も下がり、水も寒々と見えてという、寒さが皮膚感覚からも視覚からも感じられる秋の夕暮れを詠む。

【現代語訳】しみじみとした情趣に、煙っている様に見える塩釜の浦。水が寒く感じられるようになった川原に、秋の日は暮れていって。

(二折・裏・四) 水寒き川原に秋の日は暮れて

四〇 ひさぎさうち散る片山の陰

【校異】 ひさき ③ははそ ⑦ははそ

【式目】 秋(ひさぎ) 「秋の心、…ひさぎ」(連珠合璧集)

【語釈】 ○ひさぎ…ひさぎは、「きささげ」もしくは「あかめがしは」の古称と言われる。きささげは、落葉高木で、河畔に自生する。「ひさぎトアラバ、…きよき河原、かた山かげ…」(連珠合璧集)。「ぬばたまの夜のふけゆけば久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く」(万葉集・930・山部赤人、新古今集641にも入る)。「宗祇抄」では、「山部宿禰赤人作歌」として「うは玉の夜のふけゆけは楸おふるきよき河内(河内)に千鳥しはなく」と記す。他伝本に見られるははそ(柞)は、ナラ類及びクヌギの総称。柞は、紅葉の様子がよく詠まれる。「ちりしけるははその紅葉それをさへとめじとはらふ森の下風」(玉葉集・冬・863、従二位隆博)。○片山の陰…「片山陰」は山の片側が陰になっているところ。山の片側の陰。光がさしこまず、寂しい場所であり、孤独な隠遁者の住む場所でもある。次に挙げる俊恵の和歌により、

「ひさぎおふる」と「片山陰」が結びつく。「ひさぎおふるかた山かげにしのびつつふきくるものを秋の夕かぜ」（新古今集・夏・納涼をよめる・274・俊恵法師）。「うちなびき春さりくればひさぎおふるかた山かげに鶯ぞなく」（玉葉集・春上・45・鎌倉右大臣）。また、「片山陰」だけでも、玉葉集、風雅集に多く見られる語句。「くれぬとやかた山かげのきりぎりす夕日がくれの露になくらん」（玉葉集・秋上・秋歌の中に虫・633・入道前太政大臣（西園寺実兼））。「惜しとや春を鶯の鳴く／月霞む片山陰の曙に」（新撰菟玖波集・春上・75／76・前左大臣女（西園寺実遠女））。「たつの都の名ぞかくれなき／世を宇治のかた山陰に身を置いて」（行助句集・559／560）。「庭は只鳴ふす計荒にけり／うつらの床は片山のかげ」（初瀬千句第四百韻・33／34・梁心／宗砌）。

【付合】川原からひさぎを呼びこみ、また川原（水辺）に山陰（山類）を対した。三九・四〇の付合は万葉集の赤人歌による本歌取。

【一句立】ひさぎの散る片山陰の風景で、秋の景を続ける。一句は新古今集の俊恵歌や玉葉集の実朝歌などを意識した表現である。

【現代語訳】水が寒々と流れる川原に、秋の日は暮れていき、片山の陰になっているところでは、ひさぎの葉が散っている。

（二折・裏・五） ひさぎうち散る片山の陰

四一 霧のぼる木末に風やわたるらん

【校異】や ②⑤の

【式目】秋（霧） 霧（簞物） 梢（只、花とも松とも云て（一）梢の秋此中に有べし）（二座二句物） 霧に降物（可嫌打越物）

【語釈】○霧のぼる…霧がはうように上昇していく様を言う語。和歌には見えず、「霧たちのぼる」の代わりに使われる語でもある。霧の発生しやすい水辺の情景に使われるのが自然であり、また多い。心敬や宗祇によく使われる語。

「霧のぼる山本しろし秋の水」(心玉集(静嘉堂文庫本)185、芝草句内発句268(関東下向以前))。「霧のぼる夕日隠の水晴て／川添舟をさすや釣人」(享徳二年三月十五日何路百韻「さくふぢの」・9／10・心敬／宗砌)。「霧のほる滝つ河をとふくる夜に／月さへはやし石はしる水」(三島千句第四百韻・55／56)。「きり登る山下道はうつもれて／鹿鳴かたの嶺のはるけさ」(永原千句第一百韻・23／24・祥祈／紹永)。○風やわたるらん：風が梢をわたっているのだから。目に見えない風の動きを推量し「らん」を使用している。「山風や嶺の梢を渡るらん木のはみたる、谷のかけはし」(慈照院殿義政公御集・橋下落葉・130)。「川をとちかく雨はるるやま／月になる雲間は風や渡るらん」(永原千句第一百韻・4／5・兼載／紹永)。

【付合】付句の「木末」をわたる「風」によって、山陰に楸の葉が散り落ちたことになり、また、同じ「風」によって山陰にたちこめていた霧が上の方にあがっていくことになる。山陰は日が当たらず暗く、さらに梢は霧に隠され見えない。だが葉が地面に散り落ちることから考えて、木の上の方の枝の動きを類推する。視線を地面から空へと移していく付合。動的な光景を新たに付句で描き出す。

【二句立】風で霧が山をのぼっていくように見えるから、梢には風が吹き渡っているのだろうか。

【現代語訳】片山の陰では、地面に楸の葉が散り落ちている。風によって霧がのぼっていくように見えるから、楸の梢にも葉を散らす風が吹きわたっているのだろうか。

(二折・裏・六) 霧のぼる木末に風やわたるらん

四二 野中の里は月もすさまじ

【校異】なし

【式目】秋(月) 里(居所・体)

【語釈】○野中の里：野の中にぽつんとある里。里とは言いがたいようなさびしくうらぶれた様が詠まれる。「野中ト

アラバ、庵、森」(連珠合璧集)。「鐘もなき野中の里や萩のはらげふも暮ぬと風の告らん」(蛭川親元詠草・夕萩・213)。「野中のさとをたのむあはれさ／都人しきもならはぬ草枕」(文明十四年三月七日薄何百韻「咲をみよ」・34／35・一忍／正善)。○月もすさまじ：荒れ野の様に加えて、月の光も寒々しく荒涼として感じられる。「一、すさまじは、大方秋のさむきをいへるなり。」(分葉集)。「月もすさまじ杉のした風／初瀬川々霧しろく立のほり」(葉守千句第三百韻・38／39・宗祇／玄清)。

【付合】前句の木の生えている場所を、野中の里と変え、夕方にたちこめていた霧が時と共に晴れた様を野原と上空に広がる視界のうちに示す。

【一句立】野中の里の際立つた寂しさと、それゆえにさらに寒々しさを増す月を詠む。

【現代語訳】霧がのぼっていき、梢には風が吹き渡っているのだろうか。野原の中の寂しい里では、霧が晴れて見えってきた月の光までもひどく寒寒しいことだ。

【補説】第三九句で河原、四〇句でひさぎの散る河原近くの山陰、四一句で霧が上昇して隠れた梢に、風がふきわたり、霧が薄れ、四二句で空に月が見えてくる。視線が下方から上方に移っていく句の運びである。語釈の例にあげた葉守千句の宗祇と玄清の付合では、高く寒くかかる月から、高くそびえる杉の木、その下方を吹く風、流れる川と川霧と、視線を上方から下方に移してきている。山の上方から山すそへと移る視線は、季節は変えているが、「三わ山や杉のした風かすむ日に／袖にふる野々みちの春雨」(三島千句第六百韻・81／82)にも見られる。これらの例と視線の移動の向きが反対ではあるが、一連の発想の流れは同じといえよう。月のありさまはこの四二句で読みきり、「野中の里」から四三句を展開させていく。

(二折・裏・七) 野中の里は月もすさまじ

四三 狐鳴くあたりに草の枕して

【校異】なし

【式目】 羈旅（草の枕） 「旅トアラバ、草枕」（連珠合璧集） 狐（動物）

【語釈】 ○狐鳴く：狐が鳴いている。狐は、人気がないさびしい場所に出没する。野干とも。「狐、鼻やうの物も、人氣に塞かれねば、所得がほに入り住み、木霊などいふけしからぬ形も頭るゝ物也。」（徒然草第二百三十五段）。「迷はぬ法の灯もがな／狐なく道の末野に寺見えて」（竹林抄・雑下・1498・宗砌）。「をもかけは涙にちかき塚のもと／人すまぬ野にきつねなく声」（文明十八年三月二十七日何船百韻「かへれとて」・39／40・賢仲／宗祇）。四二句のような、寂しい場所、荒れた村の近くに狐が出没して鳴くというイメージは、白居易「古塚狐」の中にあり、狐は蘭や菊の草むらに隠れるというイメージもある。「古塚狐 妖且老 化為婦人顔色好：徐徐行傍荒村路 日欲暮時人静處 或歌或舞或悲啼」（白氏文集・新樂府・古塚狐）。「鼻鳴松桂枝 狐蔵蘭菊叢」（白氏文集・凶宅）。ここは白居易の漢詩からくる狐のイメージを背後に持っているであろう。○草の枕：旅先でわびしく旅寝をすること。「露けさを都につげよ野への風草のまくらにかるゝ月影」（草根集・卷六・旅宿憶都・514）。

【付合】 前句の「月」を、旅中に見る月ととりなし、故郷を離れたわびしさを漂わせる。寂しい場所である野中の里からは、「狐」を呼びだしている。

【一句立】 狐が鳴いているような、寂しく荒れたこの場所のあたりにわびしい旅寝をして。

【現代語訳】 一面の野の中にある里はわびしく、月の光も寒々しい。狐が鳴いているようなこんなわびしい場所で、旅寝してその月をみつめているのだ。

（二折・裏・八） 狐鳴くあたりに草の枕して

四四 ただつかのまの夢をだに見ず

【校異】 なし

【式目】恋(つかのまの夢) 夜分「夜分、夢」(連珠合璧集)

【語釈】○ただつかのまの夢…前句「狐」から「つかのま」には「塚」を掛けている。ほんのわずかの間の夢。「つかふるききつねの仮れる色よりもふかきまどひにそむる心よ」(拾遺愚草・十題百首・獸十・768)。「それかあらぬかつかのまの夢／きつねさへ人のすがたを仮のよに」(心敬專順点宗祇付句・169/170、異本に專順点あり)。○夢をだに見ず…夢をさえ見ることはない。「身にしむや君があたりの風ならん／夜半のとのゐは夢をだに見ず」(小鴨千句第六百韻・45/46・專順/忍誓)。

【付合】前句の「狐」から「つか」(塚)を導きだした。旅から恋へと句境を変えるための技。狐に古塚が付くのは、白居易「古塚狐 戒艷色也」より。「狐トアラバ、…ふるづか 火をともす…ばかす」(連珠合璧集)。

【一句立】ほんの一瞬ばかりの夢に見ることさえできない。夢は、恋する相手があらわれてくれる、非現実の通り路であり、旅先からはるかに相手を思う際に、夢で会えることを願う恋の句に転換した。

【現代語訳】狐が鳴いているようなこんなわびしい場所で、野宿しているのだ。古塚の狐は、美女に化け出て人を惑わすが、私はあの人と会いたくても、ほんのつかのまでも夢に見ることさえできないのだ。

(二折・裏・九) ただつかのまの夢をだに見ず

四五 誰たれがおくるこの一筆ぞおぼつか

【校異】を ③②①を ④送 ⑤お ※「を」を「お」に翻刻から文字遣を改めている

【式目】恋(一筆) 誰(人倫)

【語釈】○誰たれがおくる…一筆ぞ…誰が送ってきた手紙なのか。○この一筆ぞ…この手紙であるのか。手元にある手紙をとりあげて強い表現で示す。一筆は心から欲しく思っている、つれない恋人からの短い手紙。「一筆に見えばやこころことのはをつくしていはばかぎりもぞなき」(宗祇集・草庵にて歌よみ侍りしに、通書恋・202)。「夢かへる此夜

は明て跡もなし／なごりに文の一ふでもがな」(表佐千句第一百韻・51／52・甚昭／専順)。「わすれぬ物を人や忘れん／かはらじのその一筆を命にて」(応仁二年冬心敬等何人百韻・48／49・鈴木長敏／心敬)。「後のあしたに一筆もかな／さはりありてこぬ夜としらばかこためや」(下草(初編本)・恋上・623／624)。○おぼつかな…よくわからないことだよ。いぶかしいことだ。「余所に又枕やかはすおほつかな／おもはぬかたそ夢に見えける」(美濃千句第四百韻・25／26・紹永／宗祇)。宗砌が使う句。

【付合】手紙を送ってきながら、やってこない恋人をあてこする付句。

【一句立】一体だれが送ってきたこの手紙なのだろうか、よくわからないことだ。

【現代語訳】恋人が私のことを思っていてくれれば、私とその姿を夢に見ることで、ほんのわずかの間でも訪れてくれるであろうに、つかのまの夢さえも私は見ないのだ。そんなありさまなのだから、一体誰が、この手紙を送ってきたのか、全くもつていぶかしく、よくわからないことだ。

(二折・裏・十) たがをくるこの一筆ぞおぼつかな

四六 とはじとこそは我も言ひつれ

【校異】なし

【式目】恋(とはじ) 我(人倫)

【語釈】○とはじ…訪ねるまい。恋がうまくいかず、恋人の来訪がないのを、女側は男の冷たさのせいとし、男側は女の冷たさのせいとする、意地のはりあいを「心くらべ」として詠む歌があり、この「とはじ」は、女が冷たい態度なので、絶望してもう訪れないという男の思いを述べた言葉である。「心くらべ」により、後述正広の歌のように、精神的に消耗し枕を高くして寝る事もできず、いねがてに過ぐす状態になる。「とはぬをもたがつらさにかなしはてんかたみにしのぶこころくらべに」(続古今集・建長二年歌合し侍りに、忍恋・1004・太上天皇)。「いかがせむ心く

らべになりはててとはれずとはず夕ぐれの空(新続古今集・恋三・題しらず・法印定為)。「とはじとの心くらべに我が方は枕をとりていだにねられず」(松下集・負恋・1876・明応元年二月十七日詠)。○われも言ひつれ…私もそのようには言ったのだ。

【付合】前句は女の言い分、付句は男の言い分で、うまくいかない恋を互いに相手のせいにして、意地をはりあう。

【一句立】訪ねるまいとは、私も既に言っていました。

【現代語訳】訪れて欲しくないとの私の気持ちは示していたはずなのに、一体誰が送ってきたこの短い一筆の手紙なのか、見当もつかない。(おや、とんだ言い草だ)訪れたくないとは、確かに私が言ったのだけれど。

(二折・裏・十一) とはじとこそは我も言ひつれ

四七 花になど去年の嵐を忘るらん

【校異】 ③なと ③^{去年} ⑦嶺

【式目】 春(花) 花(一座三句物) 花近年為四句之物(連歌新式追加並新式今案等)

【語釈】 ○花…人はその美しさに心を奪われて、どこまでも求めていく。「面影に花の姿をさきだてて幾重こえこぬ峰の白雲」(長秋詠草・崇徳院近衛殿に御幸ありし日、遠尋山花といふ心をよませたまひし時よめる・207、新勅撰集57にも入集)。宗祇は既に第二一句で、花に関して、いずれ散ることに思いをいたさなくても、いつまで見ていても見果てることのないものであると詠む。○去年の嵐…去年の嵐。ここは去年の春に花を散らした嵐。「去年の嵐」は、花を吹き散らしてしまった、うらめしく残念なものである。「うらむべきこぞの嵐やにほふらん花なき里の春の夕暮」(六華和歌集・春上・147・行念法師、東撰和歌六帖213(第二句「よそのあらし」)。しかし、「去年の嵐」を思えば、激しい風に吹き散る美しい花の面影が浮かび、その花吹雪の圧倒的な美しさも念頭に浮かぶ。すなわち、嵐の際の花の面影がまず思い出され、美しさをめぐる気持ちになるものでもある。「よしの山三月の末にふぶききて去年の

嵐を埋む雪かな（松下集・花如雪・2647）。「ちりゆきし花は又さく春のきて／去年の嵐のかすむ山さと」（萱草・春・122／123）。○など…忘るらん…どうして忘れてしまうのだろうか。「いなづまをわが影になどわするらん／たゝ秋の田のかりの世の中」（葉守千句第六百韻・43／44・宗祇／肖柏）。

【付合】前句の「とはじ」は、付合では、桜をもう見に行かないと言ったという意味になる。花への執心が並一通りの人は、桜が散ればもう訪れない。それは、咲き散る桜の美しさを愛でるゆえに、花が終わった後には美しさも消えて、空虚な気分となるということでもある。従って、花を愛する思いが強い、風雅な教養人ならば、花が散った際の残念さはより強く感じられよう。ここでは、前句を、散った桜の美を心に焼き付けておく意識を持つての言葉と取り、翌年の桜の新たな魅力の前に、回想の中の落花の面影が失せてしまう様を付けたと解した。

宗祇には、「うたかた人のとはじとやする／山里の庭ゆく水に花落て」（萱草・春・214／215）という付合もあり、はかなく消えやすい命しか持たない人間が、花が流水に散り流れ去った後は、関心を失い山里の庵を訪れようとしないう景から、世のうつろいやすさを詠んでいる。この萱草の付合も、恋人の心変わりして訪ねてこない様子に、花（この場合は盛りをすぎた落花）の様を付けており、第四六句の意味の転換の参考になる。第四六・四七句の付合も、このような、すべてが無常であるとの思いを根底に持つて、つかまえた一瞬の美を、人それぞれながら、むなしくもとらえんとする気持ちを形象したのである。

【二句立】どうして、今年の桜の花が咲くすばらしい様子に、去年の花の頃、美しく花を散らす嵐が吹いたことを忘れてしまうのだろうか。今年の花の美しさを奪われて、昨年春の花吹雪の美しさを忘れてしまうことをいう。

【現代語訳】 昨年春の花吹雪のすばらしさを堪能したので、その面影を心に持つて、散つてからはもう訪れるまいと、私も言ったのだけれど、今年になり、美しい花が咲くと、その咲く様子には新たに心を奪われる。どうして、今年の花のすばらしさを見ると、昨年春の花を散らした嵐の時の美しい花吹雪を忘れてしまうのだろうか。

（二折・裏・十二）花になど去年の嵐を忘るらん

四八 春の若葉もただ秋の山

【校異】の ⑥は

【式目】春（春の若葉） 「若葉 春夏有両説。加花者为春。然而夏季大切之間可為夏云々」（連歌新式追加並新式今案等）

【語釈】○春の若葉：春に芽生える若葉。「春の若葉」という語句は、和歌・連歌共に非常に稀であり、和歌では正徹の歌がある程度である。また、連歌では、桜の花の色とまがうす紅の若葉の色を詠む例がある。特に例句にあげる毛利千句の句運びは、花とまがう若葉の色を薄紅葉と形容することで、朝霧を呼び込んで秋に転換しようとしており、この百韻に近く思われる。「ちり行を心かろしとのこるとも春の若はの後の常磐木」（草根集・落葉・610・宝徳元年十二月五日詠）。「はては塵とやはなのちるらん／くれなゐは春のわか葉を始にて」（行助句集・1607／1608）。「雪にそまよふ桜ちるかけ／春ふかき山のわか葉はうす紅葉／霞のうへのみねの朝きり」（毛利千句第三百韻・56／57／58・紹巴／紹巴／昌叱、57句紹巴註「うすもみちの色めくに雪のころかとさくら花を見まかへるとなり」、58句紹巴註「春ふかき山は春の霧霞なるへしうす紅葉と有所に朝霧の取合也」）。○秋の山：秋の紅葉した山。時雨により紅葉が染められる。「春は萌え夏は緑に紅の斑に見ゆる秋の山かも」（万葉集・卷十・山を詠む・2177・柿本人麻呂）。「月はくもらぬ河音のあめ／柴の戸をあけてむかへる秋の山」（表佐千句第七百韻・64／65・紹永／専順）。

【付合】春に萌える若葉の薄紅葉色を、桜の花の色と見紛う思いから、「春の若葉」を呼びこんでいる。付句は一句内に「春」「秋」の対比があり、相対する語句を持つ句をつないだ。付合全体では、昨年の嵐から今年咲く花、花の色とまがう春の若葉から、その若葉が深く紅葉する秋の山と、美しい桜色から紅色へ、同じ色調の情景を四季の流れの中でつないでいく。

【二句立】春には若葉であつても、ただもう、一面に紅葉した秋景色の山となつていくのだ。

【現代語訳】 どうして今年咲いている花を見ると、昨年花を散らした嵐のことを忘れてしまうのだろうか。春に芽吹く若葉も、秋には、ただもう一面に紅葉した秋の山へと、うつろい変わっていくではないか。

(二折・裏・十三) 春の若葉もただ秋の山

四九 露かすむ柴のいほりの夕暮に

【校異】 夕暮に ①②③④⑤⑥⑦⑧夕まくれ

【式目】 春(かすむ) 露(降物) かすむ(簞物) 「霞トアラバ、(詞にかすむとも) ……袖」(連珠合璧集) 庵(居所・体) いほり一、いほり一(一座二句物)

【語釈】 ○露かすむ：露もかすんでみえる。露自体は秋の景物であるが、付合でも一句でも春の句と考えてよい。次にあげる付合例に近い。「山畑に春まく種や秋の草／ふるき垣ほの露かすむ比」(文明六年正月五日何木両吟百韻・55／56・元盛／宗祇)。「露かすむ野のすゑの夕暮／春雨は山きはうすく残る日に」(老葉(吉川本)・35／36(宗祇))。「若葉にいつか木々の秋風／露霞む山路の春の朝ぼらけ」(新撰菟玖波集・春上・23／24・下冷泉政為)。「秋きてぞ露にもなれん難波江やあしの若葉に霞む月影」(閑塵集・江春月)。○柴の庵：屋根を柴で葺いた粗末な庵。深山に一人住む隠者の草庵である。「谷の水柴の庵りを結びてもすめば住みける山のおくかな」(洞院撰政治家百首・山家・1623・藤原家隆)。「花にたに柴の庵りはさひしくて／あはれなそへそかすむ夕暮」(美濃千句第五百韻・71／72・紹永／圭祐)。「恨より思ひそたちし苔衣／柴の庵に誰をたのまん」(文明六年正月五日何木両吟百韻・39／40・両句共宗祇)。

○夕暮に：対校本はすべて「夕間暮」である。「夕間暮」とは、夕暮れ時ではつきり物が見えない様子をいう。「夕まくれなかは、雲をまきそへて峯のいほりにうつ衣哉」(兼載集・擣衣・177)。

【付合】 春の景物と秋の景物とを交えて付けた付合。春の若葉も今は紅葉の秋の山になり、秋の景物である露も春の今はかすんでいる。

【一句立】柴の庵のあたりの春の夕暮れ時には、置いた露もぼうつと霞んでみえることだ。春の三句目となる。深山に一人住む隠者の草庵の周辺の光景を詠んだ。

【現代語訳】露がおりて霞んでいる柴の庵の夕暮れ時は、春に芽吹いた若葉も、ただ紅葉した秋の山のように、暗く色づいて見えていることだ。

【考察】四八句のように「春」「秋」の季節を同時に一句に詠みこむ技法は、四九句においても「露かすむ」のように、「露」「かすむ」という、それぞれの季節に密着して詠まれる現象を組み合わせる表現で示される。また、後には「朝霜のふる葉にまじる春の草／露かすむ野にさむき深水」（日文研DBでは「深水」は「さはみつ」（明応三年十月三十一日何路百韻「うつろはて」・31/32・宗忍／正時）のように、春秋の景物を句ごとにちりばめる付合の形で詠まれている。この用法は、あえて他の季節を思わせる語句をいれることで、詠む対象の美を際立たせるといふ心敬の発句の技法に、意外性を呼び起こす点で通うものがある。宗祇、宗長以後にはあまり詠まれなくなるゆえ、心敬の影響から詠まれはじめ、宗祇周辺で試みられた用法といえるであろう。

（二折・裏・十四）露かすむ柴のいほりの夕暮に

五〇 月にや苔の袖もしほらん

【校異】しほらん ②⑤しほるゝ、③しほらん ①⑥⑧しほれん

【式目】秋（月） 述懐（苔の袖） 夜分（月）

【語釈】〇月にやくしほらん…「しほる」は「しほる」も考えられようが、ここは他本の表記、異本表記も勘案し、「しほる」を取る。「しほる」は、袖が濡れてぐっしりとすること。ここは月を眺めての物思いに涙を流していることを袖の様からいう。対校本⑤⑥⑧ならば、下二段活用で、底本ならば四段活用。いずれであっても、ぬれてぐっしりとすること、しっぽりとぬれることである。「霜さゆる柴のいほりにふしわひて／あかつきちかき月のさひし

さ」(文明八年四月二十三回船百韻「ことの葉の」・81/82・宗祇/宗祇)。「又うきことに袖やしほらむ/おもひたつ身を一きわにすてもせて」(老葉(吉川本)・1749/1750)。

○**苔の袖**：僧や隠者の衣の袖。苔の衣の袖をいう。「述懐の心、…苔の衣こけの袖、…」(連珠合璧集)。「やつしはつるうき世をあきのこけのをでしほる、つゆのかぎりぞしる」(伏見院御集・秋雨・2334)。「ふりぬるさとにきてはかへらし/苔の袖いまは錦もなにかせむ」(老葉(吉川本)・1173/1774)。

【**付合**】「かすむ」から「袖」を(第四九句式目参照)、「露」からも「袖」を導く。「袖トアラバ、…涙、…露」(連珠合璧集)。

【**一句立**】月を見ての物思いからだろうか、苔の衣の袖も涙でぬれることよ。

【**現代語訳**】柴の庵のあたりの春の夕暮れ時には、置いた露もぼうつと霞んで暗くなっており、月を見ての物思いからだろうか、苔の衣の袖も涙でぬれることよ。

【訳注引用文献拠一覽】

式目の引用は京大本『連歌初学抄』(『京都大学蔵貴重連歌資料集一』(平成二三・臨川書店)(連歌新式、新式今案共に)による)、『連歌新式追加並新式今案等』を参考として挙げる場合は、木藤才蔵『連歌新式の研究』(平成一一・三弥井書店)所収太宰府天満宮文庫本によった。

【**語釈**】等における和歌の引用は、『新編国歌大観』『新編私家集大成』CD-ROM版を使用し、本文は断らない限り『新編国歌大観』CD-ROMによる。『草根集』は日次本(『新編私家集大成』所収書陵部蔵御所本)を使用し、詠歌年時がわかる場合には付記した。歌の理解に必要な場合には、『新編国歌大観』所収の類題本(ノートルダム清心女子大本)の表現も付記している。また、万葉集の歌番号は西本願寺本の番号によった。連歌等の引用は、以下に示す諸本による。

連珠合璧集：『中世の文学 連歌論集一』(昭和四七・三弥井書店)

- 文安月千句：古典文庫『千句連歌集二』（昭和五五）所収静嘉堂文庫本
 二度聞書：『中世古今集注釈書解題三』（昭和五六・赤尾照文堂）所収書陵部蔵桂宮本
 頭証院会千句：古典文庫『千句連歌集二』（昭和五五）所収内閣文庫本
 小鴨千句：古典文庫『千句連歌集三』所収小松天満宮蔵本
 寛正六年正月十六日何人百韻：『心敬連歌訳注と研究』（平成二七・笠間書院）所収大阪天満宮文庫蔵長松本
 初瀬千句：古典文庫『千句連歌集一』（昭和五三）所収小鳥居本
 熊野千句：古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収静嘉堂文庫本
 菟玖波集：『連歌大観一』所収広島大学本
 基佐句集：古典文庫『桜井基佐句集』所収書陵部蔵斑山文庫本
 和漢朗詠集永济注：『和漢朗詠集古注釈集成第三卷』（一九八九・大学堂書店）
 和漢朗詠集和談鈔：『和漢朗詠集古注釈集成第三卷』（一九八九・大学堂書店）
 園塵第四：『連歌大観二』所収早大伊地知文庫本
 行助句集：貴重古典籍叢刊11『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角川書店）所収天満宮文庫本
 延徳元年五月十一日何路両吟百韻：江藤保定『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）
 園塵第三：『連歌大観二』所収書陵部統群書類従本
 葉守千句：古典文庫『千句連歌集六』（昭和六〇）所収北野天満宮本
 三島千句：古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収鶴見大学本
 老葉（吉川本）：貴重古典籍叢刊12『宗祇句集』（昭和五二・角川書店）
 老葉（毛利本）：『連歌大観一』所収毛利家本
 袖中抄：『歌論歌学集成四』（平成二二・三弥井書店）所収高松宮本
 宗祇抄：『万葉学叢刊第十輯』（一九二八・古今書院）
 竹林抄之注：貴重古典籍叢刊2『竹林抄古註』（昭和四四・角川書店）
 愚句老葉：『連歌古注釈集』（昭和五四・角川書店）

- 老葉注 (類原文庫本) : 『連歌古注積集』 (昭和五四・角川書店)
 正徹物語 : 『歌論歌学集成第十一卷』 (平成一三・三弥井書店)
 表佐千句 : 古典文庫『千句連歌集四』 (昭和五七) 所収大東急記念文庫本
 下草 (初編本) : 『連歌大観一』 所収書陵部本
 聖廟千句 : 『兼載独吟「聖廟千句」第一百韻をよむ』 (二〇〇七・和泉書院)
 草根集 : 私家集大成所収日次本
 浅茅 : 中世の文学『連歌論集二』 (昭和五七・三弥井書店)
 園塵第一、第二 : 『連歌大観二』 所収早大図書館伊地知本
 新撰菟玖波集 : 『新撰菟玖波集全釈』 所収筑波大学本
 心玉集 (静嘉堂文庫本) : 『連歌大観一』
 享徳二年三月十五日何路百韻「さくぶぢの」 : 『連歌百韻集』 (昭和五〇・汲古書院)
 永原千句 : 古典文庫『千句連歌集七』 (昭和六〇) 所収菅原神社本
 文明十四年三月七日薄何百韻「咲をみよ」 : 重松裕巳氏「冬『宗祇時代連歌』(翻刻)」内山田孝雄氏本 (『連歌俳諧研究』第80号・平成三)
- 分葉集 : 中世の文学『連歌論集二』 (昭和五七・三弥井書店)
 文明十八年三月二十七日何船百韻「かへれとて」 : 『宗祇の研究』 (昭和四二・風間書房)
 心敬専順点宗祇付句 : 斎藤義光「心敬専順両師点宗祇付句」翻刻と解説 (『大妻女子大学文学部紀要』18・1986・3) 所収大阪天満宮蔵長松本 (れ・3・3・1)
- 応仁二年冬心敬等何人百韻 : 『心敬の生活と作品』 (昭和五七・桜楓社) 所収野坂本
 文明六年正月五日何木両吟百韻 : 『宗祇の研究』 (昭和四二・風間書房) 所収中村俊定本
 明応三年十月三十一日何路百韻「うつろはて」 : 『宗祇の研究』 (昭和四二・風間書房) 所収柿衛文庫本
 文明八年四月二十三日何船百韻「ことの葉の」 : 『宗祇の研究』 (昭和四二・風間書房) 所収京大谷村文庫宗祇自筆本
 毛利千句 : 早稲田大学図書館伊地知文庫蔵『巴叱註千句』 (文庫20 00111) HP画像による。

【参考文献】

伊藤伸江・奥田勲『心敬連歌 訳注と研究』（平成二七・笠間書院）

この訳注はJSPS科研費JP17K02421「独吟百韻分析による宗祇連歌の多面的新研究」の助成を受けたものである。